

12.7 学校教育で学ぶ防災について

自然災害に対応するには科学的な知見と経験知が基本となりますので、そのような基本的なものを身に着けて関心を持ち続けることが大事なことになります。そういう意味では、学校教育の中で自分たちが暮らしている地域を知るという学習が大切なことは明白です。しかし、これを継続して定着したものにするには様々な課題があります。一つ目は教える側に、危機意識とか災害への意識を適切に理解することが必要です。二つ目は、そのための人材の確保です。専門的な面からのサポートを受けることも必要ではありますが、まずは地域に居る人材の発掘が大事なことです。地域に古くから住んでいる人の中には地域の歴史や文化に詳しい方が必ず居ますので、そういう方に協力してもらったり、地域の市民センターなどの情報を活用してプランニングするという方法もあると思います。これがうまくいくと、学校教育が成果を上げるとともに、地域の防災力も向上して、学校と地域が新たな災害文化を生んでいくと思います。そして、次世代の人材が広く要請されていきますので、いま児童や生徒である方々も重要な防災の担い手としての基本知識を持つこととなります。

日本人は、世界でも注目される災害列島で暮らして多様な文化を醸成してきていますので、子供たちが将来海外に行って自分の国を説明するときにも、歴史と風土を適切に説明できる人、自然災害を語れることは大変に大事な他国への民間貢献にもなると思われます。学校教育では、避難訓練といった実践型の備えと同時に、どうして災害列島なのかというような基本的な知識を習得することで、関心や興味が広がっていきますので、災害に限らずに広い視野で見る力を持つようにもなると思われます。

実際には、災害に遭わないと、防災といっても関心を持ってもらえないという方が多くいらっしゃると思いますが、病気になるように管理することこそが健康の秘訣であるというのは当然のことです。防災教育は、防災に関する知識や技術について学習しながら実践的なものを習得するという重要な目標があります。ここで大事なことは災害への関心を持続させるにはどうするのか、社会へ出てから、あるいは家庭人になっても生活の根本は防災への関心であるということ伝えていって欲しいと思います。確かに、防災は学ぶべき領域の一部ではありますが、この災害列島で暮らしていくために基本となることを改めて知る機会になってほしいと思います。

災害列島で暮らすということと国際的に貢献できる国になるためには、人間力、生活力(学力や知力)と市民力(連帯しての貢献)の三位一体をどのように醸成していくのかが、おそらく誰も期待しているものであろうと思います。しかし、実は、防災教育を実施するには大きな障害があることも知っておく必要があります。一つは、教育よりもハード対策を先行させよという意見があったり、二つ目は、災害は突発的でいつ起きるかわからないものを相手にしている余裕はないという考え方、三つ目は、防災教育が独自の位置を占めているという状況にはないことです。そして、発生してからでは間に合わないというのが災害であるということも事実です。